

オーランドーと Oak Tree

ヴァージニア・ウルフの *Orlando* における女性の創作の意義

伊瀬知ひとみ

ヴァージニア・ウルフの *Orlando: A Biography* は、主人公オーランドーが 300 年以上を生き、その途中で男性から女性に性転換し、様々な人生を経験し、詩集『榿の木』を完成させる物語である。先行研究では、性別や時代を超越するその内容から本作はファンタジーやパロディとして捉えられており、ウルフの作品群の中でも異色の物語として扱われてきた。また近年では、オーランドーの衣服における性別超越の表象に注目して、クィア思想に基づいた両性具有的解釈が行われている。つまり、これまで本作品は、ウルフの他の作品と比べて軽んじられてきたうえに、女性の問題に目を向ける読み方がそれほどされてこなかったと言える。しかし、オーランドーが詩集を完成させる過程や、詩集のタイトルが『榿の木』である点、実際に作中にも樹木としての榿の木が登場する点を考えても、この作品がウルフの他の作品同様、女性性の問題に深く切り込んでいることは明らかである。本発表では、作品中に登場するオーランドーの詩作の様子と「榿の木」の表象に注目して、ウルフが作中で表現しようとした女性の創作の意義について考察していく。

最初に、詩集『榿の木』をオーランドーが男性ではなく女性のときに完成させたプロットについて考察する。16 世紀から 20 世紀前半のイギリス文学の歴史について簡単に振り返ると、イギリスでは 18 世紀頃に小説が誕生したが、何人もの女性たちが連綿と活躍するのは、男性作家よりも随分あとの 19 世紀である。女性たちはようやく書かれる客体から書く主体になれたわけだが、それでも彼女たち女性作家の作品のテーマの多くは家庭内の出来事だった。20 世紀のモダニズムの時代でも作家の多くは男性で、女性作家はそれまでと比べると増えてはきたものの、少数派のままだった。モダニズム作家の一人であるウルフは、自身の数々の作品の中で女性が作品を書くことについて何度も言及しており、書くこと、とりわけ女性の執筆に強いこだわりを持っていたことが彼女の作品群からうかがえる。

それでは、*Orlando* では「書くこと」の意味はどのように位置づけられているのだろうか。男性のときのオーランドーは貴族階級ということもあり、いつも剣を身につけていた。作品冒頭で彼が木にぶら下がったムーア人の首に剣を何度も振るっている場面はその一例だが、剣はペニスのメタファーであり、剣を持つことは権力の象徴、男性性の表象である。女性に変身した後のオーランドーは剣は持っていない。男性のときも女性のときも共通して持っていたのはペンとノートであり、彼／彼女は詩作に奮闘していた。ペンは元々はペニスのメタファーだったが、それは文学史が示すように、男性だけが文学作品を書いていたことから明らかである。しかし文学史における女性の登場と重なるように、ペンの男性性の象徴は薄れていき、女性もその書く力を持てるようになったと捉えることができる。自分の言葉で書く権利を男性たちに独占されてきた女性たちが、その権利を男性から乱暴に奪うのではなく、紆余曲折を経ながらも獲得していった軌跡が *Orlando* の中に透けて見える。さらに、オーランドーが辿り着いた創作の源は、これまでの男性中心の文壇にはなかった、あるいはあったとしてもその存在を軽視されてきたものだった。男性批評家が求めるような崇高なものではなく、些細なものからひらめきを得る、それこそがオーランドーにとっての創作のあり方なのである。オーランドーが男性のときには自身で納得のいく詩を書けなかったが、女性に性別が変化したのちに創作の真理を発見し、物語の最後の最後に詩集を完成させたことも、文学が新しいものに変遷していったことと、女性の創作の意義が強調されていると言える。

次に、「榿の木」の表象について分析する。本作品中には「榿の木」という言葉がしばしば登場するが、それには、オーランドーが住む館のパークに生えている樹木の種類としての「榿の木」と、オーランドーが完成させようと 300 年以上かけて書き続けた詩集のタイトルとしての『榿の木』の、二つの意味がこめられている。樹木としての「榿の木」は、力、長寿、不死、再生と生命などのイメージを持ち、特に文学作品では、王、賢者、長老など、家父長制において権力を持つ立場の男性たちの所有物の材料として登場することが多かった。

では、*Orlando* の中では樹木としての榿の木はどのように描かれ、主人公オーランドーにどのような影響を与えているのだろうか。作品冒頭では、16 歳の少年オーランドーが、自分たち一族が所有する広大なパークの丘へ登り、一本の榿の木がそびえたつ所に来た場面が描かれている。ここで男性であるオーランドーが榿の木の根元に横たわって心身ともに回復させているのは、従来の榿の木のイメージを表現していると言える。さらに、自分が主体になって馬や船を操っているように感じているのは、何かを支配している点でまさに男性的である。この

後オーランドーはロシアの皇女サーシャに会い恋に落ちるもあえなく失恋し、その上自信を持って書いた詩は詩人ニック・グリーンへの風刺の対象にまでなってしまう。傷心の彼は、愛も野心も女性も詩人も全て空しく、文学は茶番だとまで思うようになる。誰とも会わず部屋にこもって読み書き三昧だった彼は、信頼できるものは自然しかないと思い、犬を連れて広大なパークを歩き、久しぶりに自然の美しさを目の当たりにする。ここでの榎の木は、力を与えるのと同時にオーランドーを癒す役割を担っており、榎の木が単なるマスキュリティではなくヒーリングをも表象していることが読み取れる。その後オーランドーの性別は男性から女性に変わるが、女性になってからもオーランドーと榎の木との結びつきは繰り返し描かれる。三十一歳になりヴィクトリア朝の社会を生きるオーランドーは、ふとしたときでも榎の木を思い浮かべる。女性になったオーランドーは紆余曲折を経て遂に詩集を完成させる。300年以上かけて追い求めた夢が叶ったにもかかわらず、これまでの人生を振り返った彼女は、自分が何者なのか分からなくなる。そのようなときにも彼女は、榎の木立の間を歩き、心を落ち着かせている。女性に性別が変化したあとのオーランドーと榎の木との関係で、最も注目すべき場面は作品のクライマックスである。屋敷から庭に出たオーランドーは時間を知らせる時計の音を耳にしたとき、その音が自分の体を貫いて飛び去ったように感じ、現在の圧迫から解き放たれて、気づけば榎の木が立つ丘の上に立っていた。この場面のオーランドーの様子は、榎の木の根元にいる点で16歳の少年だったときのオーランドーの様子と非常に似ている。16歳のときと状況が違うのは、オーランドーが36歳の女性であること、そして詩集を完成させたことである。つまり、榎の木の力は男性だけが受け取れるものではなく、女性も同じように享受できるのである。従来榎の木が表象していた力強さ、不死、再生と生命は女性も受け取れること、マスキュリティが独占していた力が女性にも解放されることを、ウルフはこの場面に書き込もうとしたと言える。

最後に、オーランドーの出産と擬人化された詩の原稿について考察していく。オーランドーは少年だった頃から36歳の女性のときまで、物語全般を通してずっと原稿を持ち続けている。肌身離さず持ち続けてきたこの原稿は、オーランドーとともに300年間以上の様々な困難を乗り越え、まさしくオーランドーの分身と言える。注目すべきは、オーランドーの原稿がいよいよ完成されて詩集『榎の木』として世に出されようとする場面の前後で、原稿が擬人化されている点である。これらの場面では原稿が妊娠・出産時の胎児のように扱われており、妊娠から出産の一連の流れが、女性としてのオーランドーが詩集を完成させるまでの数々の場面に投射されている。オーランドーが男性だったときにも彼は原稿を胸元に抱えていたが、男性時代には原稿を生き物に例えるような描写はなされておらず、単に、原稿を紛失しないように大切に保管している、そのような描写で済ませている。

また、オーランドーは作中で実際に出産を経験している。男性時代には手痛い失恋を経験し、女性になってからは庇護の対象として男性から扱われる経験も重ね、ヴィクトリア朝の時代精神に束縛されることに疑問を持ったオーランドーだが、その後運命の相手シェルダーマインと出会い、あっという間に婚約、婚前交渉、結婚、出産を経験する。当時の女性に求められた社会規範に照らし合わせると、婚前交渉が結婚よりも先になされたことはやや気になる点ではある。しかしそれは、時代精神に服従しすぎることもなく抗いすぎることもない、オーランドーなりの生き方の一つの表れであろう。19世紀の社会規範は女性に貞淑さを求める一方で、結婚し子どもを何人も生み育てることも要請していた。しかし、オーランドーは社会的要請に従って子どもを産んだのではなく、自分の気持ちに素直に従った結果妊娠し、子どもを産んだ。つまり、産みたいから産んだ、ということである。これは作品を生みかかったから詩を書き続けたことと繋がっている。詩集の完成と男児の出産は、オーランドーの人生の重大局面であり、作品 *Orlando* のクライマックスとしても挙げられるが、プロットの観点でも、メタファーの観点でも、創作と出産が重ね合わされていると言える。創作は従来男性の領域にあると見なされ続け、反対に、出産は女性ができる行為の一つである。女性になったオーランドーが創作と出産をほぼ同時期に果たしているという話の展開は、創作は女性にも可能であることを端的に表している。さらに、出産というイベントで新たな命が生まれる様子は、榎の木のイメージの一つである生命と結びつけることができる。

ウルフの *Orlando* では、女性の文学の歴史がなぞられつつ、文学の変遷と女性の創作の意義が強調されていることが分かる。また、樹木の榎の木が、オーランドーが男性だったときにも女性になってからも作品を通して描かれており、榎の木の持つ力強さはマスキュリンなものではなく女性とも共有できることが読み取れる。さらに、オーランドーの詩集が完成する過程とオーランドー自身の出産までの過程を比較することで、オーランドーの創作と出産のイメージが重ね合わされていることは明らかである。これにより、*Orlando* は単なるファンタジーではなく、ウルフの他の作品と同じように、女性の創作を伝えるメッセージが込められていると言える。ダイナミックなストーリー展開の裏には、今日にも通じる、女性の創作の可能性が秘められている。だからこそ、発表から100年近く経った現在も本作品の魅力は色褪せることなく読み継がれているのである。